

現場の声から考える!

何が法人融資業務の時短を阻んでいるのか?



新 型コロナウィルスの感染急拡大を受けて緊急対応が求められた2020年に比べると、21年における金融機関の法人営業は平時に近い活動にシフトした。加えて、業務のデジタル化も日増しに進んだ。しかし、それでも法人担当者が忙しいことは変わらない。

日々の定例的な業務に加えて突発的に発生する業務とも格闘しながら、本懐である融資セールの新規開拓に取り組

金融機関は保守的であり、「変革」を避ける傾向が強いといわれる。今回お話を伺った方からは、総じて保守的な体制こそが、融資業務の時短を阻んでいるという意見が聞かれた。

金融機関の体質が効率化の障害?

金融機関は保守的であり、「変革」を避ける傾向が強いといわれる。今回お話を伺った方からは、総じて保守的な体制こそが、融資業務の時短を阻んでいるという意見が聞かれた。

「そもそもなぜ法人担当者は業務の時短ができないのか」について考えていく。

組む——そんな法人担当者は常に時間に追われており、各業務における「時短」が重要となっている。

とはいえ「言うは易く行うは難し」とはよく言ったもので、営業店の担当者からは「それができるのならとづくにやっている」という声が飛んでくることだろう。

そこで、本稿では金融機関の法人営業経験者や現場の行職員にヒアリングを実施。

「そもそもなぜ法人担当者は業務の時短ができないのか」について考えていく。

「日本の金融機関は『融資金は絶対に返ってくる』という前提のもとで融資しており、焦付きへの警戒がひどく強いという体質があります。だから、手間をかけて数多くの書類を用意するのは、その分、業務への取組姿勢に『遊び』がないとも言えますね。それがお客様からの金融機関への信頼や信用につながっているともいえますが、一方で業務の効率化が進まない要因にもなっています」(元大手行員Aさん)

「金融機関においてはまだまだ定例化した無駄な、あるいは非効率な業務が多いと思います。他の業界では、自分だけでなく別の部署からも違う目線で業務が評価され、無駄だと思われるような作業はどんどん削減していくという動きがみられますが、金融機関は縦割り風土が強く、そのような取組みは減多に見られま

特集

前さばきが決め手!

法人融資の時短テクニック



効率的な活動を実現する準備&工夫

多 忙な法人担当者が効率的に活動していくためには、準備段階で対策を講じる「前さばき」が重要だ。本特集では、法人融資の活動を「訪問活動」「新規開拓」「融資手続き」「審査」の4つに大別し、それぞれで時短を可能にする事前準備の方法を解説する。

